

べていることも (54 ページ)、正確さを欠いている。非集中化が本格的に始まったのは、周知のように 1954 年以降である。

紙数の関係で紹介ははなはだ不満足なものとなってしまったが、全體として本書は高い評価をあたえらるべきものであり、ソヴェト工業經濟を學ぼうとする者はぜひとも眼を通す必要がある。その中に見られる缺陷はおそらく今後豫想される改訂の過程でしだいに是正されてゆくであろう。またわれわれ日本の研究者としては、本書公刊後のソヴェト經濟學界における研究の前進をたえずあとづけることによって本書を補足する必要があるだろう。

(竹浪祥一郎)

ロベール・ギエヌフ

『マルクス價值論の問題』

Robert Guihéneuf: LE PROBLEME DE LA THEORIE MARXISTE DE LA VALEUR, pp. 194, Paris, 1952, Librairie Armand Colin.

1

著者ギエヌフはフランスのマルクス主義者であるが経歴は詳らかでない。本書はマルクス主義の「總體のなかでの價值論の位置づけと意義」の確定をめざしている (p. 6)。そしてこの研究の結論の 1 つで著者の強調するように價值論の正しい把握は辯證法的方法の正しい理解を必要とするゆえ方法の解明に大きな比重がおかれている。この點はさいきん出版された R. L. Meek, *Studies in the Labour Theory of Value*, 1956 が労働價值論のなかでのマルクスの位置づけに重點がおかれているのと對照的である。本書は 3 部よりなり、第 1 部はマルクス主義のエッセンスたる辯證法的唯物論の成立過程とその内容が扱われ、辯證法的唯物論こそマルクスの經濟學の方法の基礎であるとし價值論のマルクス主義での位置づけがなされ、第 2 部では價值論の解説と意義およびその基本的論理構造が明らかにされている。第 3 部では價值論論争が對象となる。著者の力點はこのさまざまなマルクス解釋の方法論的基礎の解明にむけられているかにみえる。ここでの著者の涉獵はきわめて廣汎である。

2

第 1 部「マルクスの方法」は「辯證法」・「史的唯物論」・「マルクスの經濟學の方法」・「資本論の構造」の 4 章よりなる。著者はここで「辯證法の一般的運動諸型態をはじめて包括的かつ意識的な仕方で敘述した」(Marx) Hegel が古典哲學にたいしてもつ優位と Hegel 體系の

矛盾から出發し、Feuerbach から Marx にいたる辯證法的觀念論から辯證法的唯物論への發展を論理的に跡づける。さいきんの初期マルクス研究は Marx の思想の發展をその歴史的社會的基礎過程との統一のもとに追求する方向に進んでいるが、そのような視角はここでは見られない。それは 1 つには本書が 52 年の出版であるからであり、2 つには著者の方法が論理主義的であるからだ。著者が Marx の思想の發展の劃期ともみるものは 44 年の「手稿」と 47 年の「哲學の貧困」である。前者は「眞に唯物論的な最初の論稿」(p. 22) とされ、上部構造と下部構造という範疇が固められ、Marx が「實踐」Praxis とよんだ労働はプロレタリアートの労働として歴史的社會的定在のもとに捉えられ、しかも階級社會におけるその疎外が資本制蓄積の一般法則の上に把握されている。著者は Marx が「實踐」とよんだ労働の概念の成立に注意している。それは「自然と人間を結ぶ生きた絆」(p. 23) であり、Marx の後の著作の「大黒柱」となっている、という。この自然と人間の相互作用の媒介項であり、社會發展の基礎である主體的人間活動としての労働の把握と、その階級社會における疎外把握が著者の労働價值論理解の礎になつていのは云うまでもない。ここにブルジョア的人間把握批判の出發點がおかれよう。Feuerbach は人間をその主體적實踐としての労働において促ええず、古典派經濟學は労働の疎外された構造を把握しえなかつた。附言すれば、疎外の科學的把握は 61~63 年 (遺稿「直接的生産過程の諸結果」) で完成する。ここではプロレタリアートの集團的労働の生産力が資本の生産力に轉化し、かつ集團的労働そのものが個々の労働者に對立するものとして現われるという疎外の二重構造が労働の資本への實質的包攝の結果として現われてくる事が分析されている。「哲學の貧困」においては資本主義發展の矛盾した構造を統一的に捉ええずその歴史的進歩性と反動性をバラバラに理解する Sismondi 以來の小ブル社會主義が批判の對象となるが、著者はここで「唯物論と辯證法の結合」(p. 24) がなされる、という。だがここでは基本的には Ricardo の理論にもとづく批判であり、Ricardo 理論の克服=資本主義的諸矛盾の體系的把握が辯證法の經濟學への適用によるべきだとの豫告といえよう。「結合」がなされるのは「經濟學批判」においてであろう。

「資本論の構造」なる章でプランの問題が扱われているが、著者の立場は H. Grossmann や Alex Barbon ("La Dialectique du Capital", *La Revue Internationale*, Sept. 1946, No. 8) によるプラン變更説である。が本書が 52 年の出版であることから、すでに Grund-

risse)によるより精密な論證(佐藤金三郎氏『經濟學批判』體系と『資本論』經濟學雜誌 Vol. 31. No. 5. 6, その他)をもっている我國ではとりたてて問題になる點を含んではいない。著者は資本論が細部の仕上げは別として基本的には完結した體系であることを強調する。この場合當初のプランでの國家, 外國貿易, 世界市場がどのような形で扱われるかが問題となるが, この點についての著者の言及はみられない。

第2部「マルクス價值論」は「使用價值と交換價值」「價值の本質 fondement たる労働」「剰餘價值の理論」「資本」「價值から價格へ」の5章よりなる。ここでは價值論から價格論への展開の論理が資本論にしたがってそれぞれの章で追及される。マルクス價值論への批判の大半が價值論と價格論の分斷と價值論の現實的性格の無視より發するだけに著者の力點もこの二點の解明におかれている。資本主義經濟におけるもっとも直接的な對象は商品であり, マルクスはこれの二重の性格を追求する。商品そのものは具體的人間労働の成果であり, 自然と人間の辯證法的關係を内包しているが他方交換においては労働の具體的性格は否定され, ここに具體的有用労働と抽象的労働の矛盾が現われる, と著者は云う(p. 63)。ところで商品の分析による抽象的労働の折出が, すべてのマルクス批判家にとってのマルクス理解の躓きの石となる。そこでマルクスにおける抽象的労働の正確な意味を解明することが重要である。著者によれば, 抽象的労働は決して假説ないし論理的前提といったものでなく, 社會的實在である。それは「労働のいっさいの形態に共通する表現」でとらえられた「現實の労働」そのものであり, 「具體的労働から同一の簡單労働への還元は……たえず實際に行われている」(p. 73)。著者は第1に「資本論」の注(Bd. I., N. 17 a)にある B. Franklin の言葉をひいてその實在性をのべる。資本主義社會での労働の流動性こそその等質性の表現であり複雑労働を簡單労働に約元させる條件である。第2に資本主義生産とりわけ大工業の發展は「生産諸條件の同質化」「抽象的労働の一般化」への傾向をもっている。第3に資本主義生産の發展は孤立的労働を社會的労働に轉化させる歴史的必然的傾向をもつ。かくして抽象的労働は1つの社會的實在である(pp. 74~76)。抽象的労働の現實的性格についての著者の立場は正統マルクス主義とされている技術說の見解にある。ところで抽象的労働なるものは社會的分業と私的生産という條件の下での諸生産者の社會關係を表現する範疇に他ならない。したがってその現實的性格なるものはこの關係の現實性であって, 大工業の下での簡單労働といった感覺的可視的な意味での現實性では

ありえない。機械制大工業の下で技術的にいかに労働が等質化し簡單労働が支配しても, 現實的労働はつねに一面では織布労働なり製鐵労働なりの具體的労働であり, かれの現實的労働を他面で抽象的労働たらしめるものはそれが簡單労働であるとか流動性をもっているとかいう技術的側面にかかわるのではなくかれの労働がその雇主の所有として雇主の私的労働として社會的分業體制の一環にくみこまれているという社會關係であろう。それは生産過程と流通過程の統一たる社會的生産過程にかかわることであって, 機械制大工業の發展の下での労働の簡單化・等質化といった流通過程と切離された意味での生産過程のみにかかわる問題ではないであろう。著者は抽象的労働が假説ないし論理的前提にすぎないとするマルクス批判家にたいしてその現實性を強調するのあまり, それに可視的感性的實在性を附與しようとする誤りをおかしているかにみえる。抽象的労働が資本主義的生産ではなくて商品生産の論理段階で分析されていることの意味が著者の立場からは當然にもうすれ, 「著者〔マルクス〕がみとおす現實的諸條件は資本主義生産様式のそれである。かれの價值論はこの限定を考慮に入れてのみ意味をもつ」(p. 48)といったある意味では正しいながらも一面的な價值論把握が結果する。

第3部「マルクス價值論の諸解釋」は6章よりなり, マルクス批判の諸類型と反批判が與えられる。第1章「價值論と價格論に形式上の矛盾は存在するか」では Böhm-Bawerk, V. Pareto, Tugan-Baranowski による矛盾の主張が検討される。たとえば V. Pareto (“Les Systèmes socialistes”, 1902—3, Paris) によれば商品の價格を決定するものは労働量と需給關係である。Marx は資本論第1巻で商品の價值を労働の結晶だとしている。ところが第3巻では商品の價值が價格と一致する條件が3つあげられている(cf. Marx, Bd. III., S. 203)。第1巻では無限定に商品の價格が價值に, 價值が労働に還元されたが, 第3巻によればそれは需要と供給が一致しているという条件の上でのことである。價格の一方の決定因たる需要を固定的にみれば價格が労働量によって決定されるのは當り前であり, 第1巻での説明は詭辯にすぎない, と Pareto は批判する。Pareto のこの批判は Meek も指摘するように(Ibid, p. 208)自由競争下のいわば均衡價格たる生産價格の理論的基礎づけが問題である抽象段階と現實の市場價格の決定が問題となる論理段階との混同に立つかぎり Marx の方法への無理解にすぎず, 「Pareto は Marx の矛盾を證明しえなかった」(本書 p. 112)といえよう。だが價值量を決定するとされる社會的必要労働時間なる概念において社

會的欲望はいかなる意義をもっているかという形で問題を立ててみるならば、Pareto の批判は Bernstein が価値概念のうちに效用をとりこんで二元的価値論をうちたてた發端にもふれあい、Marx 經濟學の内部でも大論争をまきおこした點にもふれてくる。さらに社會的需要の構造とその變動が生産に與える反作用の全面的研究は Marx においても「まったくついでに述べ」られているにすぎず競争論に残された課題であるし、この分野でのマルクス經濟學の發展がまたれるのであるが、こういう意味での積極的な問題提起ないし展開ではなく、批判者への資本論の枠内からの反駁が本書の基本的態度となっているのはいささか残念な氣もする。第2章「二重の説明原理にたつ価値論」では、価値論を經濟學的思考の方便あるいは規範といった觀念論的原理と理解し價格論はそれに反して現實的經濟原理に立脚するとみる W. Sombart, Simmel, Koppel, A. Labriola への反批判、第3章「価値論は假説にもとづく論理體系」ではそのような解釋にたつ Bernstein, B. Croce, Sidney Hook への解答、第4章「マルクス価値論とその『揚棄』」では G. Sorel, Antonelli, Henri de Man 等プラグマチックなあるいは社會學的なマルクス解釋への反批判、第5章「マルクス価値論の實證主義的解釋」では現象のみを實在的とし価値論の必要を認めないマルクス批判家として W. Lexis, K. Schmidt, J. Robinson が扱われ、とりわけ Robinson 夫人に多くの頁が割かれている。Robinson の労働価値論理解は An essay... ののちに *Science & Society* 誌 (Vol. XVIII, No. 2) 上の H. Denis 等との討論、R. L. Meek との討論をへて微妙な變化をみせているかに見え、近著 *The Accumulation of Capital* では諸階級への富の分配の尺度として、そのかぎりでは Ricardo 的な労働時間による価値規定をうけいれているかに見える (Robinson, p. 28)。第6章「マルクス主義と限界學派 marginalisme」では、現象分析は近代理論に構造分析はマルクス理論にそれぞれ優位がみられ兩者の結合が必要といった我國でも一頃流行した主張が Oskar Lange "Marxian economics and modern economics," *Review of Economic Studies* (1935, Vol. II, No. 3) を手がかりにして検討される。著者は限界計算の原理はその洗練された形態においては個人の行動の心理學的原理として意味をもつが經濟學的には個人の行動の客觀的諸條件が問題となろうし、他方労働価値論がマルクス學說から追放されればマルクス學說そのものが消えうせるから結合は不可能であるという結論に歸着する (p. 186)。著者の力點は方法論におかれているが、附言すれば労働価値論ぬきの價格論が經濟學

的根據をもちうるかが問題となろう。たとえばかの「フル・コスト原則」においても平均利潤率を理論的に説明するためには社會的總利潤量がある一定の大いさをもって與えられねばならないが労働価値論ぬきでいかにして理論的に可能かがマルクス經濟學の側からの近代理論への質問となろう。またいわゆる構造分析におけるマルクス主義の優位なるものは労働価値論にもとづく剩餘價值把握と諸階級の統一的把握あってこそそのことであり、価値論ぬきでは無方法な社會學的制度把握しかありえないのではないか、といった疑問が残ろう。

3

マルクス価値論およびその批判史の検討ののち著者の到達する結論はつぎの點である。第一にマルクス価値論の意義にたいする過小評價はすべてマルクス主義一般の否定に到達する。「それゆえ価値論はマルクスの體系の本質的諸要素の1つである」こと。第2に「価値論解釋の裏にはたえずマルクスの方法の理解が浮彫されている。……多くの誤謬と不正確さは辯證法的方法のまちがった理解に發する」こと。第3にマルクスの方法は「辯證法的と同時に現實的方法である。その獨自性は兩者の緊密な關連にある」こと。諸解釋はこの特質の少くも一面を念頭におきはしたが、他の面を犠牲にしてのことであった (pp. 187~8)。こうして著者は価値論そして方法の意義を確定する。本書が 52 年の出版であるため、第1部での初期マルクスの問題、プランの問題は物足りない感を否めないが、第3部での包括的なマルクス価値論批判史の検討はこの種の文獻がきわめて少ないだけに高く評價されてよからう。

(大島雄一)

ポリヤンスキー

『18 世紀ロシアにおけるマニユファクチュアの經濟的構成』

Ф. Я. Полянский, Экономический строй мануфактуры в России XVIII века, АН СССР Институт экономики, Изд-во АН СССР, М., 1956, 451 стр.

戦後、ソヴェト史學界において、ロシア史の封建制と資本主義との時代區分が大きくとりあげられ、とりわけ資本主義の成立の問題をめぐる激しい論争が展開されたことは周知のところである。この時代區分論争において、ロシアにおける封建制から資本主義への移行は、《зачатки 萌芽》、《уклад Уклард》、《формация 構成體》の三段階にわけて考察すべきであるとされ、さらに工業における資本主義の發展の三段階にかんするレー